昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和五十二年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）

# 慈光

第二十九巻　第十一号
（通第三四一号）

## 目次

638.26

内愚外賢……近角常観……(1)
人生随想……柳瀬留治……(5)
聞思録抄……誉田豊吉……(8)
法悦抄……清水清吉……(13)
念仏詩抄……木村無相……(17)
わが生涯の師……花田正夫……(20)

# 内愚外賢

近角常観

たとい牛盗人とはいわるともしは善人もしは後世者
もしは仏法者とみゆるように振舞うべからず

乙卯の歳聖人八十三歳御満悦の余、安静の御寿影を画かしめられしとき、一方には愚禿鈔を書きて其御自督を傾けられた。実に愚禿鈔は聖人がその中心の自白にてまします、其思召は題号下の御悲歎にて伺うことが出来る。

「賢者の信を聞きて、愚禿の心を顕（あらわ）す。賢者の信は、内は賢にして外は愚なり。愚禿の心は内は愚にして外は賢なり。」とあるが即御自督の御悲歎である。

特に深くいただき奉ることは、「内は愚にして外は賢なり」と言い放たれたままであるところが実に深く感ずることである。唯信鈔文意に於いて（内に虚仮を懐（いだ）く」を釈したまう文に、この世の人は無実のこころのみにして浄土をねがう人は、いつわりへつらいのこころのみなりときこえたり、世をすつるも名のこころ、利のこころをさきとするゆえなり。しかれば善人にもあらず、賢人にもあらず、精進のこころもなし、懈怠のこころのみにして、うちはかなしく、いつわりへつろうこころのみつねにして、まことのこころなき身としるべしと言い放ちたままである

かく言い放ちたるままにして、さらに善くすることの出来ぬが我等の有様である。而して善くせんと試みんとする心が起らぬのである。全くあやまりはつるより仕方がない。しかし何とかせねばならぬという心はない。なぜなれば、どこ〳〵までも見抜いて下されて御見捨てない御慈悲である。さればとて一点これでよいという様な心持はない、御悲歎の文に「恥ず可し傷む可し矣」と仰せらるるのが是である。

恥ずべし傷むべしというは、我等が煩悩を見捨てたまわぬ御慈悲にとかされて、煩悩の氷解けて功徳の水となる心



持である。悪くてならぬと堅く結びて益々氷るのではない、氷より暖を出さんとりきむのではない、氷のままでよいと寒風にさらすのではない、いかな堅き氷の中心までも飽くまで透りて下さる日光の力にて、自然に強剛難化の氷もとけて恥ずべし傷むべしと融けてくるのが、よくもよくも我は内は愚にして外は賢なりという御悲歎である。

ややもすれば恥ずべし傷むべしというは、愚ではならぬと固くなることのようにも思われる。現に御一代聞書には蓮如上人の御弟子が愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の数に入ることを喜ばず、真証の證（さとり）近づくことを快（たのし）まずとあるをよみて、往生すべきか、すまじきかと互に語りあいけるを、物越にきこしめされて、蓮如上人立出でて申されるには、されば愛欲も名利も煩悩なり、されば機のあつかいをするは雑修なりと仰せられ候とある。往生すべきか、すまじきかというが即ち雑修である。仏かねてしろしめして煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば喜ぶべきことを喜ばず、いそぎ浄土へまいりたき心のなさ煩悩具足の凡夫を特に憐みたまうのである。して見れば毫髪も機のあつかいなくして恥ずべし傷むべしと慚愧懺悔の外はない。

浄土真宗に帰すれども、真実の心はありがたし、虚仮不実のわが身にて、清浄の心もさらになしとあるが、実にこの内愚外賢と打ち出したる御懺悔である。しかし人信前には浄土真宗に帰したとあるに、清浄の心もさらになしでは矛盾じゃないかと思うたことがあった。しかるにいただきて見れば我等が不真実不清浄であるを見捨てたまわぬが如来の清浄真実にてまします、如来は火也我等は炭也、炭の心底まで御慈悲の火が透りて下さるのである。されど私共自身は徹頭徹尾炭である、火が炭の心底まで透るところで火が燃える。御慈悲の火は我等が不実の心を憐みたまうなれば、御真実をいただけばいただくほど我身の不実を懺悔するの外はない。

気心を知りたる友人の前には何事も打明けて語り合いて懺悔する如く、如来の前には心の底まで打明けて懺悔するが悲歎の御文の、誠に知んぬ悲しい哉愚禿鸞愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑し、定聚の数に入るを喜ばず、真証の證に近づくことを快まず、恥ずべし、傷むべし矣と心を傾けての御自白である。歎異鈔第九章も同じ思召である、悲歎迷懐和讃も同意である。よしあしの文字をもしらぬ人はみな、まことのこころなりけるを、善悪の字しりがおは、おおそらごとのかたちなり、是非しらず邪正もわかぬこの身にて、小慈小悲もなけれども、名利に人師をこの

むなり、この言い放ちたる御懺悔がありがたい。名利に人師をこのむなりと懺悔された、実に何とも云えぬ痛酷なる御懺悔である。我等は実に名利の奴である、愛欲の塊である。

兎角蓮如上人の御弟子が往生すべきか、すまじきかと案ぜられたるが如く、兎角名利でもよいか、名利は悪いとかなり安いのである、名利でよいならば恥ずべし傷むべしでもあるまい。又信巻に引きたまいし涅槃経の御文に、名利の為にせず、利養の為にせず勝他の為にせずという御文があるべきでない。又聖人が法然上人の御前にて、人師戒師停止すべきよし誓言発願おわりきとあるを見れば、実に事実の上に於いては、たしかに名利をすてたまえること、実に内賢外愚にてまします。

かく言えば直に夫では名利で悪いか名利は止めねばならぬかとなり安いのである。勿論止められるものなれば止めるもよかろう。石は落ちぬようにしようとすれども、落ちぬわけにはゆかぬ、浮かぼうとすれど浮かぶことは出来ぬ。其落ちることをあわれみたまう如来の願力自然の御力なればこそ、重き石が軽々と打ち上げられるのである。されば毫髪（ごうはつ）も機のあつかいはいらぬのである。

否機のあつかいをするは石自身が上らんとし、炭自身が火を出さんと欲し、氷自らが融けんと欲するようなものである。其上らぬものを引上げるが願力である。其炭を火にするが慈悲の火である、氷の心まで飽くまで透るが如来の光明である。恥ずべし、傷むべしと心底まで融けて仕舞うより外はない。

かくとかしていただくものの忽ち寒風に吹かれて本来の氷の性をあらわして又凍らんとし、炭火は火箸を以てつまみ出せば、忽にして見る〳〵炭にならんとするのである。我等は御慈悲を喜んだ跡から直にその炭の本性をあらわし、氷の本性をあらわすのである。我等は外に一応喜びがあらわれても本来が冷かな凡愚なれば、兎角虚仮不実の本性をあらわし来るのである。この点では内愚外賢を仰せられたが実に我等の真相である。嗚呼内愚外賢は我等の写真である、嗚呼愚なる我等なる哉、聖人はこの御自督（ごじとく）を傾けたまいたのが実に内愚外賢の御自白である。

外に賢善精進の相を現ずるを得ざれ、内に虚仮を懐けば也、是聖人の真面目である、浄土真宗の安心乃化儀この一語に尽きたりといただくべきである。世の中の尼のこころをすてよかし、女牛の角はさもあらばあれ、嗚呼我等は徹



頭徹尾罪悪の塊である。

たとい牛盗人といわるとも、もしは善人、もしは後世者、もしは仏法者とみゆるように振舞うべからずと聖人の仰せられたも、畢竟この内愚外賢の御懺愧よりあらわれたる御思召である。人より牛盗人と呼ばるると倆よ、若しは後世者、善人、仏法者と標榜する程の価値あるものではない、との御自督より来りたのである。勿論当時随分黒衣、裳無衣を着し、高声に念仏して、仏法者めかした連中が諸国に横行したということが、歴史上にも見える所を見れば、其弊もありたるなれど、本来我等が左程価値あるものではない、寧ろ人より牛盗人と呼ばるとも我等に適したる名前と申すべきである。

聖人が愚禿を名のりたまいたのが全く是である。卑謙であるというて事更に卑下したまいしことと思うならば、大なる誤である。御本書に仰せらるる如く非僧非俗なりとて中心より破戒無慚の愚禿なりとの御自督の自然の表現である。聖人が我は是教信沙弥の定（じょう）なりと仰せられたは、この非僧非俗の意味である。教信沙弥と云えば直に卑賤生活とか労働者とかいう他の意味を雑え来りて、却て遁世、隠者、卑賤ということと思うならば誤である。教信沙弥というも聖徳太子の化儀（けぎ）も同様である、資生産業即実相という聖徳太子の御信仰は、あきないをもし、奉公をもせよ、獲漁をもせよというのと同様である。是でこそ却て遁世でない。聖人の隠遁は山より市へ出でられたる隠遁である。聖徳太子が世間虚仮唯仏是真と遺言されたるが如く、煩悩具足の凡夫火宅無常の世界は、みなもてそらごと、たわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわしますとの思召である。されば死後も某閉眼せば加茂川にいれて魚にあたうべしと仰せられたのである。恰も教信沙弥が遺言して遺骸を鳥獣に与えたのと同じである

最後に聖徳太子の乙卯から親鸞聖人の乙卯まで六百六十年親鸞聖人の乙卯より本年まで六百六十年であるを思うて、転（うたた）両聖人を追慕し奉ること切なる次第である

# 人生随想

柳瀬留治

## 私のもつ闇

いま恰も草木の芽生え季を迎えて、周囲の人々が相次いで死去され、私は身にしみて無常を感じさせられている。歌の関係の会で顔を合わせた人々も、親しい顔が次ぎつぎ欠けていって頓に淋しい、ともらしている。

私も老いてどんなにか老人に見えることだろうが、古い顔馴染の人々がしばらくの間に見違える程老いこんでいるのに驚き、且つ淋しさを感じさせられるのであった。空穂忌の懇親会には可成り老人もいたようだが、八十五の私が最高年齢なのか、乾盃の音頭を申付けられた。

日々の新聞紙上に出る名士の死亡欄にも七十を越した人が稀であり、八十五まで生きている人が少くなったのかと思う。でも私の故郷で遠い親族にあたる百二歳の老婆があり、この春亡くなり、従姉にあたる九十二の老婆が春の豪雪中に亡くなり、故郷でも私は高齢者となってしまった。

人は我々老人を見、かねて死の覚悟がついていて、自若として死んでゆけるだろうと思うようである。ところが老いて死が目前に迫るといよいよ死にともないのである。第一死ぬ断末魔の苦痛はいやである。さらに己れ自身が死という闇黒の底に独り堕ちてゆくのが恐しいのである。

私は自我が強く、従って生命に対する執着は強く、その生死がローソクの火を吹き消した如く消えて跡方もなくなるものとは思えない。

現代の青年達が学校で生物学をやり、人間の生命を虫けら同様に考える人生観をもち、己の生命を投捨てることも、人の生命を奪うことも何でもないことに考える人があるらしい。生命は己にたった一つのかけがえのないもので、その生命の死という問題は各々に与えられた人生上最大の問題である。生きている人は誰も彼もこの命題を課せられている。それが解決されない人は、死という期限をもって強制的に処理されてゆくのである。

自分の生命につき平常はさほどに思わないが、病気となったり、危険に瀕して来ると死の問題に逢着する。癌などになって死に直面すると宗教によって光明を見出して安心するほかに途がなくなる。宗教において、禅でも、特に念仏宗では、平生業成を肝要とし、平生の健やかな時に己が心の問題、死に面しての安心決定しておくことを肝要としている。

私が宗教を求めたのは、この汚く醜い己の心を如何にしようという煩悶から出発した。そしてこの「我」の底知れぬ己に悩み迷う私を憐み給う無限大慈にお会いして、初めて大安心をし、心の問題、生と死の問題を一気に解き放たれ、人生上裸で生き得るようになったのである。

それは照したまう光明によっての「光」の面で、己の「闇」を眺めると、自我の無明の底知れぬ己であることに変りはない。私の老いの孤独や、死に迫られる無常感は襲い来る「闇」のなしわざであろう。

（五二年六月）

## 断と不断

この「断」という字を「だん」とよみ、断ち切るの意に訓みたい。だから「やめる」「決断す」の意で、この文で言いたいことは、我々の情執はたち切りにくいもので、人々は人生上それに悩み、それで迷い、それで我々は苦しむ。これを断つことを「救い」とも「悟り」ともいう。この「断」に至り得てはじめて自在に楽しく世に生き得られるのである。

世間に優柔不断の人があり、中々決断がつかない、或は物事に慎重なのかも知れない。又それに似たのに「日和見主義」というのがあり、側から情勢を見ていてよさそうな側にくっつく。多くは確かな主義主張がなく便利主義で、男らしくないとの世評を受ける。

ここでは表現という上から、言わんとすることを決断し、表現に当る問題をまず取り上げたい。世に「表現は孤独である」と云われる如く、己の思いをのべるにあたり、己の意志決定に基く他なく、誰に相談しようもなく心許ない。あえて自ら意志を決定し、口外するほかない。そしてその表現に対し自ら責めを負わねばならない。

断とはその意志決定の態度、腹のすわりである。この意志決定を知的に見、判断といっている。論理学的に前提から推論して断案を得るのだ。だが情意は知的のみでは決しられない。心理上己れというものの主人公は情意といった自我そのもので、情執的で根強く全面的な同意なくては全く同じないものである。智なんかは打算的に上手に渡ろうとする浅いものである。元々我々の感情というものは、我々の感覚器官がとらえた好悪の感で、自我を満たし或は防

衛なすべく心の上に起る気分といった働きで、肉体にまつわつた執念的なものである。

私の言わんとする断とは、判断に似てはいるが、知的判断を越えたものである。知的判断は自我を守る知的な一作用で自我の一部分に過ぎない。自我の力をもって自我自体を断ずることは出来難い。これは心層心理学でも手に負えぬもので、古来仏教上究極をなすもので禅でも念仏でも信一つにより、即時にして欲情煩悩を断じ得るのである。

かって筑紫野春草君は家庭上の問題で、己の情執が断ち難くて久しく悩んでいた。これを断っことは自我を断っことで、それは念仏による「断」の他ないことを説き、君の心の情執の泥の底が涯しがなくて、どうにも処置出来ないだろう。だが無限大慈の清浄な心水で無限に流し去るから安心して任せようというのだ。自分でどうにも処置出来ない自我の我情の一切を大悲に任せたまえ、といったことによって、己の自我、我情の全幅を仏にまかせ、大安心をし、心を閉ず雲がにわかに晴れた。

その際に出した歌集を「断流」と題し、その歓喜を詠んでいる。彼は断じ得られたのでなく、どうしても断じ得られぬことがわかったのだ。即ち「断じ得られぬ自我だと断じ得た」のである。即ち不断の断である。彼は煩悩を断ぜずして涅槃を得たのである。凡そ己の性格で悩む人も、性格は一生治らぬものと断じて性格から解放されることが出来るのである。

### 池の鯉

荒業の嵩らに枝の払われて見るに淋しやわが庭の木々
枝のなき坊主の木々ら幾片の青葉いだして五月とはなる
本職の苦心に池の澄みわたり嬉しげなりよ錦鯉のむれ
池の水清く澄めれば鯉の肌紅若やかに白のすがしき
老先のせかるる今日も若鯉ら脊鰭ゆたゆた楽しげにあり
流るともなき池水に身を委ね遊べる鯉よ我も遊ばな
人目さけ水底深くひそみいる真鯉よわれに似てかなしかり



# 聞思録抄

誉田豊吉

### 知られたい心、知られたくない心

わがよき処は人に知られたし。わが悪しき処は人に知られたくなし。知られたき心も、知られたくなき心も、その根源は名利にあり。

真に知られたのは、わが善き心と、悪き心と共に残りなく知られた時にあり。

われは仏より真に知られおるなり。されどわれらは仏より知られん事を願わず。人よりわがよき点のみを知られんことを願えり、浅間しきかな。

### 捨てられるのを恐れる心、悲しき心

四十過ぎたる婦人が、人に捨てられまじとて白粉にて皺を塗りかくす、実にあわれなり。白髪を黒く染むるもまたあわれなり。

人に捨てられまじとて無理に学問を励み、新知識をあさる、その心根いと不憫なり。人に媚びへつらい、捨てられまじとてなり。

われはすべての人に捨てられ、唯一の仏に済わる。ここに慰安あり。仏に済われ、導かれ、喜び勇みて最後の一息まで努力す。かくて世間の取捨に超越するなり。同じく努力するも、その心根に雲泥の差あり。一は悲しく、他はうれし。

### 絶対の仏と信仰

絶対は無限なり、無辺なり、不可思議なり。絶対の仏は無限の慈悲、無碍の智慧、永劫の加威力なり。絶対の仏は常に相対の吾等を見そなわして、永遠に慈悲の手を垂れて倦み給うことなし。

吾等は無限の慈悲に促がされて、自己の罪悪に気付き、仏の救済を感謝するなり。

信仰は吾人の相対の感情、智慧、意志によりて成るもの

にあらず。吾人相対の力によるものは、末遂に破れ、永続することなし。

信仰とは絶対の仏が堂々とわれ等相対の胸の中に現われ給いしことを自覚することなり。そこに絶対の信仰あり、絶対の安心あり、永劫にわたりて変ぜず。わが相対の心は変りずめなれども、絶対の慈悲は不変なる故、われらの信は変ずることなし。

## 苦悩の救済（絶対の満足）

吾人の苦悩の根源は我執の一念にあり。この根源を絶たずんば苦悩を脱すること能わず。

苦悩救済の方法として世人の唱うる所を見るに、一に意志を強くせよ、猛進せよ。二に身体を強めよ。三に運動せよ。四に深呼吸せよ、静坐せよ。五に理性を明にせよ。六に運命をあきらめよ。以上の方法も多少の効果あるべきも、畢竟、一時の鎮痛剤にすぎず。

自己の力にては永久にわたりて意志を強くすることも、身体を健にすることも出来るものにあらず。疾病にかかり、老境に入り、貧苦に陥る時は、意志も身体も、その苦を慰する能わず。運命とあきらむるも何となく淋しく物足らぬ感を除く能わず。

吾人のあらゆる苦悩は絶対の慈悲にして始めて救済せらる。我執のやまぬ者を飽までも捨てたまわぬ悲心に浴して絶対の安心あり、絶対の満足あり。

## 如来の直言

我々は時間、空間というものに迷い、如来を遠い昔、遠い処に眺めている。

如来には時間も空間もない。如来は今ここに厳としてまします。わが心の奥に入りこみたまう。如来は我に直々に説法したまう。

釈尊も、法然聖人も親鸞聖人も、其の他の高僧知識は皆現在に活きてわれに説法して聞かせて下さる。

我は直々にこれを頂かねばならぬ。経巻は如来の御声である。論部は高僧の御言葉である。我は生き生きしたる御心をお受けせねばならぬ。

## 曲者毒蛇

如何に求めてもお慈悲が聞えぬ。有り難い心が起らぬ。言ばれぬ。浅間しい心が直らぬ。何だか不快の気持になることがある。

こんなにあるのは我が心中に曲者がいるからだ。「我」



という毒蛇が潜んでいるからだ。この曲者、毒蛇を済度するには仏の光明より外に何物もない。

仏は永劫の昔からの曲者、毒蛇を済度せんためにご苦労下されている。されば我は何の計らいもなく御慈悲の光明に照され念仏申しさえすれば、曲者、毒蛇も正体を顕わして遂に消えて仕舞うものである。否、姿を変えて、善神善竜となるものである。

## 信仰の試金石

理屈で造った信仰、感情で出来た信仰も、平日にあってはひとかどの信仰のようであり、それで安心出来るものである。然しそんな信仰は実際問題に触るればがらりと崩れてしまう。実際問題の中でも、死、金銭、名誉などは最も信仰を験する試金石である。

真に無常と感ぜられているか、真に罪悪と知れているか、一応はそんなことは承知している積りなれど、実際になれば死が恐ろしく、金銭、名誉が惜しくて遂には気も狂いそうになる。

仏を信ずる一面には真に此の世に頼みになるものは一つもない。自分は全く無一物であることが知れねばならぬ。

他面には、この頼りなき無一物の我を未来永劫救済し給うお方は、弥陀一仏であると深くたのみにする所がなくてはならぬ。

獲信の後も我等は凡夫なれば実際問題に逢着して、或は恐れ、或は悲しむ事あるも、忽ちお慈悲の光明に照されて苦中に一種の楽境を見出すものである。こうして実際問題に触るるごとに我等の信は一層強く固くなるものである。

## 愚者の信

賢者は自らつとめて仏を信ぜんとす。愚者は仏より信ぜしめらる。前者は強き如きも、実は弱小なる小我の空想に過ぎず。後者は弱きが如しと雖も、実は強大なる御仏の実現なり。

賢者必ずしも賢ならず、愚者必ずしも愚ならず。尼入道の無知の身と知りて一向に念仏するこそたのしけれ。

## 仮の信仰と真の信仰

仏を向うに置いてこれを信ずるは仮の信仰なり。浄土を眺めてこれに往生せんと求むるは仮の信仰なり。かくの如きは自ら仏とか、浄土とかの理想を描いて自らこれを信じ、又は求むるものなり。実際の出来事に遭遇すれば忽ち

に瓦解す。

真の信仰は不思議の願力を頂くことなり。われら凡夫、如何に仏を信ぜんとするも信じ得るものに非ず。信じたかと思うと忽ち疑うなり。若し真に仏を信ずるとせば、こちらに純真の信実心を有せざるべからず、われは虚仮不実なり。この信実心なし。いかで仏を信ずるを得むや。若しわが力にて仏を信じ得ば、われは仏と同じきなり。罪悪の凡夫何ぞ仏と同じからんや。仏の方より我等罪悪生死に沈めるを見そなはして、いたまらずして、現在此処に来りたまうて我を救いたまうなり。

われは常に逃げ廻わつて仏に背いておるに、仏は先に廻り後に立ってわれらを救わずばおかずと御苦労したまう。われ仏を信ずるにあらず。仏われを信じて捨てたまわぬなり。仏われを信じたまうとは、わが心中を残る隈なく洞見して救わねば止まぬとの慈悲をいう。何たる広大なるお慈悲ぞ。何たる不思議の願力ぞ。この慈悲、この願力に真実頭の下ったのが真の信仰なり。この慈悲は決して遠方にましますのではない。近く々々苦しむ我等の心中に来り給う。我等は空想的に、学問的に仏を造り仏を求むるも、万劫末代に救済に与かること能わず。唯、現下実際の生活にて仏より救われるなり。南無阿弥陀仏。

## 入信の機縁

人々各々異なる業報によりて異なる苦悩を嘗む。仏はかく悩める衆生を一人一人の機縁に応じて救済したまう。親はその子の気質に応じて一人一人異なれる教育法を以て愛撫す。仏は種々の善巧方便を以て一人一人を別々に救い給う。仏の御方便は種々多様なれど、この者を助けずば措かぬとの慈悲は一なり。大慈悲の御心より何とかして救いたしと千万無量の御方便を案出し給いしなり。

されば人がこんな工合にて入信したから自分もその真似をしたら入信すべしと思いて、これを模倣するも決して信をうるものにあらず。人夫々に業報を異にす。その業病に応じて施薬し給うが仏なり。故に宗教は自分一人の事なり。特殊の事なり。一般的の事にあらず。但し万人同一の信を得るというゆえんは、かく入信の機縁は異なるも、皆仏の大願業力に催されて慈悲を頂く点においては同一なればなり。かくわれらは兄弟なり、同明なり。賢愚、貧富、職業に相異なるも皆大御親の子なり、大恩師の生徒なり。

## 信仰の生活

信仰の生活は仏相手の生活である。人間相手の生活ではない。仏のお恵みを感謝しつっ生活するのが信者の生活で



ある。

しかし、この人生を離れた別世界の生活ではない。この人生に来らせ給う仏の仰せに随順する生活である。寺院生活のみが信仰の生活にあらず、在家の生活もまた信仰の生活である。されば工場に於ても、学校に於ても、はた刑務所に於ても、仏の光明を仰ぐ時は、これ既ち信仰の生活である。

われは行住坐臥、仏より護られ、仏より恵まれおるなり。仏と共に生活せるなり。南無阿弥陀仏

## 信者の心

真の孝子は少しも自分の力を認めぬ。自分の力で孝行しているとは思わぬ。自分は不孝なものである。この不孝な奴を慈しみ給う親の御恩が実に有難い。この御恩を思えばジッとしておることは出来ぬ。何とかして報恩をしなければならぬ。されど御恩の万分の一をも報ずることは出来ぬ。実に慚愧の到りである。たとえいくらか報恩の行をしたにした処が、それは自分の力でない。親の親切の身に徹したるおかげで、畢竟親の御力である。真の孝子は親の慈悲以外に何物をも認めぬ。

信者の心もまたこの通りである。自分の力で仏を信じているとは思わぬ。われは曽無一善の凡夫である、この凡夫が仏のお恵みで助けていただき、信心を得させて貰うているのである。無限の仏恩を思えばどうしても忘れんとして忘れることが出来ない。何とかして報恩の勉めをせずにはおられぬ。

されど、我は信後もやはり無力罪悪の奴である。とても御恩に報いることは出来ぬ。出来ぬながら仏の御指図のまにまに、種々の仕事をさせて頂くのである。自分には善をなす力はない、人を教化する資格はない。唯仏のお力われに入り込み給いて、不思議のことをなさしめ給うことがある。自分は何処までも地獄一定の徒らものである。仏は何処までもこの仕方なき奴をおわれみ助け給い、この奴をお使い下さるのである、要するに、真の孝子は自分は孝子とは思わない。真の信者は、自分は信者とは思わねのである。

〈以上『聞思録』より抄出〉

# 法悦抄

## 聞光願生

○

ややもすれば相手を自分の型にはめようとする。恐ろしいことだ。ささやかながらも、同志の方々と語り合って常にそれを恐れる。

○

無色の太陽の光線にあたると、すべての物がおのおのその個性の色をあらわす。そこに百花燎爛の世界が展開される。無色とは色のないことではない。すべての色を包含していることだ。抱くとは「我」の主張ではない。相手の個性やら立場を理解して、そこに一色となって涙をそそぐ世界だ。

相手を理解して涙をそそぐ世界は、自己に目覚めさせていただく所から生れる。自己の値打に目覚めずして、如何にして相手を理解し得よう。自己の値打を知るには、自己の姿を鏡にうつさねばならぬ。

## 清水清吉

いや、とつくの昔に、先手をかけて仏様はうつして御座るのだが、煩悩の雲霧に閉ざされて見えずに居ったのだ。いま大願業力の御催しにあづかり、始めて見る己が姿のあさまし、あさまし。

仰がんかな、大悲弘誓の本願力を！

○

いかなる人も、絶対無限に対するとき、そこに出て来る価は零である。自分の価を零としらされて、すべての人に対するとき、そこに出てくる答は無限大の力である。

○

人と人との交りは、大低利害関係をもといとしている。だから刎頸（ふんけい）の交りなどと云って居ても、利害関係の相友するとき他愛もなく離れてしまう。

まったく人と人との交り位浮き雲めいたものはない。それを変らないもの、いっいっまでも続くものと見るところに悩みが生れる。情ないことだ。



魂の通うお交りによって始めてつきない、破れないお交りが出来るのだ。そうなれば、たとえ利害関係が生じて、いやな心が起きてもなお心の底に通うものがあるから…。

病気のお見舞い、その他のお見舞いでも、心が根本問題なのに、ややもすれば人ずてなりとも品物さえ送ればお見舞いと心得ている。だからお互様、物の多少の比較が問題になる。したがって物のなくなった時は、お見舞が出来ぬことになる。ほんとうに窮屈な世界だ。

○

無心に遊ぶ子供の姿を見た時、誰か怒る気持になり得よう。無心に眠る子供の寝顔を見たとき、誰か邪気を発するものがあろう。天真爛漫の童心に接するときほど、わが身を省みさせられるときはない。

童心とは無我の鏡ではなかろうか。ひるがえって私の姿を見たときに、無我の境とはあまりにもかけへだたり、それはただ遠い大空の月と、唯仰ぐばかりである。

日々利害の問題にとらわれて、はてしない泥田に沈むあさましさ。されども、やるせなきみ親の念願の成就せられた至徳の尊号のたまものにより、み親のただ一人子とさせて頂き、泥田の私の上に、およびもつかぬ月影を宿させていただくこと、ただ、ただ有り難いことだ。一子地の境地こそは、ただ童心の境地にして、またそこに無我の境地が展開せられる。これひとえにみ親の念願の御催しによることである。

○

またもや年を重ねることになった。いつでも年末を迎えるたびに、つい愚痴がこぼれる。何をしてこの一年間を送ったのかとふり返って見たときに、その思いを深くせずには居らなれい。

しかし、み仏様の御教を聞いた、その事ばかりは力となって私の上に現存する。そして来る年を迎える根本の力となって下さる。そればかりは何といっても有難いことだ。

去る夜、五、六人の若人と共に雑談のおり、突然一人の男が「仏教では何を教えるのか」と質問を出した。私は、「ただすべての事物をハッキリと見ることを教えて下さるのだ」と即答した。

実際、何がむづかしいと云ったところで、事物をハッキリ見る位むつかしいことはない。先哲の御苦労はここにあるのだ。何を見るにも自分本位、云いかえれば自分の欲、缺陥を土台として見て、それを離れては何物をも見ることが出来ぬのが、私の姿だ。

事物をはっきり見ることと一口に云えば、至極簡単なようにも思われるが、さて実生活の上において物をハッキリ見ることが、それはそれは容易なことではない。

世の中のすべての問題が千差万別、何一つとして同じものがないのに、何か一つの型で処理していこうとしているところから、種々な無理が生ずる。例題の式の暗記がすべての人の行き方である。したがって応用問題になると、何をどうしてよいのか手のつけようがない。

根本問題の公式を理解していくことを忘れている。その公式は、当面の問題に何の関係もないように考えて軽視し、目先きの問題さえかたずけば、それで安心なような気でいる。

公式とは何ぞや、即ちありのままの姿を知ることなのだ。それから生れる解決法こそ徹底的なのに、膏薬ばりでごまかすのがこの世の姿なのだ。だからつまづきが起るのが当然すぎる当然である。

私は毎日種々な問題で悩んでいる。しかしそれを煎じつめると、皆これから生れて来ることを知らしていただくときに、唯おのが無明に泣くだけだ。世の人はその行き方を消極的だと云うが、決してそうではない。前に進むのも、足もとを見ずに進み得ようか。足もとを見ることは、前に躍進する根底を造るのだ。そこに積極的活動の力が生れると信ずる。

○

私は遠い深いお話を求める前に、まず今の自分の生きる道を聞きたい。私はすぐいいかげんのところで妥協したがる。そしてまたすぐごまかしたくなる。毎日の私の生活をいかに清算すればよいか。いろいろな立派な教えを見聞するけれども、毎日こんな浅間しい心がどんどん湧いてきて自分が実行出来る教えは一つもない。さびしい。

「健康第一」の標語を見れば、持病もちの自分としていくら病院歩きをし、薬を水のように浴びても癒えぬ自分としては、これぐらい無慈悲な言葉はない。それは健康な人や健康になり得る人にとっては音楽のように響くかも知れぬが、到底健康体に縁のない私にとっては、無慈悲の言葉とひびくばかりだ。

「金が無ければ首の無いのに劣る」との言葉も、又前同様に考えられる。要するに健康になる道、金持ちになる道、人格の向上の道がいくらあっても、私にとっては縁の遠いことだ。

今幸い、この私の姿をとつくの昔に見透されて、憐れと思召されておこされた仏様のみ教えを聞信する時、さびしいままに明るい生活をさせていただくこと、何物にもかえられぬ有り難いことだ。

○

春の陽射しにかたい氷もいっしか解けそめて、松の緑があらわれはじめ、何ともいわれぬ明るい心地がする。私の



固い煩悩の氷も、み仏様のやるせないお慈悲にいっの間にやら、和やかにさせて頂いて、緑のような明るい生活をさせていただく。

○

花の賑いもほんの一時、緑したたる許りの世界と化す。縁！万物の伸びゆかんとする色。伸びゆく自分をじっと見ておいでになる御仏の大抱擁力につつまれている自分は全く仕合せものだ。いつまでも〳〵仏様の懐の中に縁であり得る私は何んとした仕合せ者であろう。

○

願い！それは私にはなかった。目先の問題やら、順境やらに障えられてなかなかに真実の願いを見つけ得なかったのだ。その願いを私に代って成就して、それを私にうけとってくれと願って下されるのが仏様だ。私は願う身にあらずして、願われている身であった。

○

われ拾円のお金を有する時、壱円のお金を持つ人をさげすむ。最大限九円九拾銭まで有する人に対して然り。かくわれより小額を有する人をさげすむは、反対に、われより幾何ほどなりとも多く有する人を懼るるの我なり。

智慧、学問、地位またしかり。このうぬぼれと、へこたれ心にいつも苦しむ。されど如来の慈光のもとに、変転きわまりなき現実を肯定するとき、廓然として安らかさを得るを覚える。

暑かるべきときに暑からざれば憂う。これ不順なればなり、不順は憂いの種なり。三毒の生活にありながら、苦しみよりのがれんとす。これ不順なり。されど、苦しみより苦しみへの旅たるや論なし。苦しみの当然さを、わが業としてうけてこえることが出来るのは、そこに垂れたまう如来の願心のたのもしさによる。

○

どんな環境によっても支配を受けぬと頑張っている人がある。しかしかく云っているそのこと自体が環境に支配されていることではあるまいか？　私は周囲によって毎日支配されつつある私である。すこぶる弱い私であると知らしめられる。そのことが周囲に支配されぬ心境、即ち力強い境地ではあるまいか。

真実の姿に徹することはなかなかむつかしい。然し、徹し得ぬ身と、はっきり判らして頂いた時に、それこそ、真実の姿に徹した時ではあるまいか。

「知らざるを知らずとせよ、これ知れるなり。そは人智の絶頂である」と清沢先生が叫ばれているが、これこそこの辺の消息と味われる。

〈『法悦抄』より抄出〉

# 念仏詩抄

木村無相

## 今の呼び声

和上お歌に
〃今死ぬる
身をばそのまま
救うぞと
ひまなくひびく
弥陀の呼び声――〃

今墮つる身に
今の呼び声
ひまなくひびく
今の呼び声
そのままと呼ぶ
今の呼び声
ナムアミダブツ

（和上＝禿顕誠師）

今の呼び声
ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

## つかみとられて

和上おおせに
〃聞く気も
願う心も無き
いやできらいで
逃げる者を
追いまわし
つかみとって
救いたもう――〃



追いまわされて
お聴聞
つかみとられて
ナムアミダブツ
ただ救われるの
ほかはない

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

## よくよく御用心

和上おおせに
〃随分骨は折りながら
骨の折り場がちがう
この心に聞かせることに
骨おるのは骨折り損なり
この心に聞かせにかかるは
つまらぬことなり
まだ、昔の夢がさめぬ
定散心なり
よくよく御用心――〃

この心
聞かせ甲斐なし
それよりも
み名のイワレを
ひたむきに聞け

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

## 今の後生

和上おおせに
〃今でもなければ
後生でもなんでもない
また他力ということも
たたぬことになる――〃

後生　後生と
いうけれど
生きた後生は
今の後生
迫った後生は

今の後生
今の一大事に
今のお他力
ナムアミダブツが
今のお他力——

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

## 子を負うて

和上おおせに
〃子を負うて
子をさがす如く
提灯（ちょうちん）つけて
すり火をさがすが如し
念仏となえながら
信心をさがし
機法一体成就の
名号のイワレ聞きながら
領解（りょうげ）を
求める——〃

六字のほかに
信心なく
イワレのほかに
領解なし

ナムアミダブツ
ナムアミダブツ

## 法信抄

九月号に述懐和讃をお書き下さり有難うございました。

無慚無愧のこの身にて
まことのこころはなけれども
弥陀の廻向の御名なれば
功徳は十方に満ちたもう

まことに〳〵「弥陀の廻向の御名」がなければ、この悪衆生、邪見、無信の者いかがいたしましょう。

「功徳は十方に満ちたもう」は外にもでしようが、内にも、私の内面の八万四千の煩悩のすみずみまで満ちたまいて、煩悩の身をしらしめ給うて、ただ念仏よりほかないことを知らしめて下さることであります云々。



# わが生涯の師

（池山先生御忌月に際して）

花田正夫

山あり河ある人の世の旅にあって、よい師に恵まれることはまことに幸せであるが、ことに真実の仏道を求めるうえでは、十分に信頼できる師に会うことは暗夜に灯火を与えられるに等しい。

古人も「三年学ばずして師をえらべ」と云うているが、それについて、自分が師をえらぶ力がないのが実際である。高い山からは周囲の低い山を見渡すことが出来るが、低い山からは高い山の頂上は見えない。そこで、たまたまよい師にめぐり会うても、それをそれと知る智慧のない身には、猫に小判で、空しくすごしてしまう。

最近「出会い」ということばがよく使われているが、それは、英雄にして英雄を知り、子を持って知る親の恩、の道理で、同じ水平線上に居る者同志の間で云えることである。親鸞聖人は、値、遇の二字に「まうあう」と訓じられている。まうあうとは、下位の者が上位の者にあう時で、この反対の時は「まかりあう」と昔はいった由である。仏法にあうなどとは、智目、行足のない身に出来る話ではない。よい師にあうことが出来るのも、全く自分の力ではなく、すっかりの恵みである。白杵祖山老師は「恵みによって恵みをたまわる」と云われた。たとえば、子供が親から絵本を貰って、象さんが、お猿さんがと喜ぶが、その前に象を教え猿を教えて貰っている、即ち、絵本も、それを喜ぶ心までも親から恵まれているのに等しい。

さて、私は六高に入った年から池山栄吉先生にドイツ語を教えられたけれど、はじめは、一寸変った先生だな、中学の先生とは違っている、ぐらいに思っていた。そこで自分勝手に手当り次第に心のよるべになるものを求めて、二三の教えをひもといたけれど、どの教えも立派であるが、私がついて行けず、野良犬が餌を求めて芥溜めをあさり歩くような生活を続けていた。

或日、伯父にその苦衷をうったえると、歎異鈔を渡され、これを読めと、力強く勧めてくれた。早速、二階の一

室にこもって一心に読んだ。然し仏縁の薄いというより殆んとなかった私には、解らぬことばかりであったが、

「弥陀の本願には老少善悪の人をえらばす云々」

「善悪の二つ総じてもて存知せざるなり。その故は如来の御心に善しと思召すほどに知りとおしたらばこそ、善きを知りたるにてもあらめ、如来の悪しと思召す程に知りとおしたらばこそ悪しさを知りたるにてもあらめ…」

とあるのが、胸をうった。

そこで、この本はよい本ですな、と伯父に告げると、お前は、ドイツ語を池山先生に教えられているそうだが、先生は、日本でも稀れなこの書の体読者だから、お訪ねしてよく聞くようにと、勧められた。

その後、伯父にあって、池山先生を二、三度お訪ねしたと報告すると、伯父がわざわざ先生をお訪ねして、御礼をしてくれたと、先生から聞かされた。覇気満々の高校生の私には、伯父がそんなことをしてくれなくてもと思ったが、後年になって、それに伯父自身の大きなよろこびからであり、心の放浪者の私への親切からであったと気づいた。

ともかくも、こうした機縁から先生に近づきはじめ、その後、六年目、私の二十四の秋、住吉のお宅に伺って、はじめて念仏裡に御礼を申上げた時、非常に先生もよろこんで下さった。それから御在世中、何かとお導きを蒙って来たが、もう先生がお亡くなりになって四十年になった、お亡くなりになった当座は、何とも云えぬ淋しさにおちたが、お念仏と共に私の内に先生は生きて語りかけて下さることに気づき、それからは、京都のお宅まで行かなくても、何時でも、何処でも、そして何をしていても、お念仏と共に先生にお会い出来るようになった。このように生き死にを超えて、先生と私を結びつけて下さるものは歎異鈔であり、お念仏である。

○

先生は、本鈔にある「親鸞は弟子一人も持たず候」との聖人の御心境を、麗容の聖人、と讃えられたが、同時にそれを先生は身につけられていて、いつも私共と同座されて、共々に弥陀仏の徳光を渇仰して下さった。

さて、弟子のない人が弟子一人も持たずというのは当然のことであるが、多くの人々から真の知識と慕われている聖人が、弟子一人も持たず、と仰言るのは、妙な話で、一寸腑におちかねることである。ことに執着の強い私には、一寸したことでも師匠ぶりたがる身には、破天荒なことばであった。先生は聖人のこの御心境をたとえられて、寒い時でも風呂に入って十分に暖って出ると、薄着でも苦にならないように、聖人が弥陀仏の大悲心に満悦されて自然に



あらわれた徳光であると仰言っていた。

中村元氏著の釈尊伝に、御入滅近くなった日、阿難は向って「わたくしは修行僧のなかまを導くであろう、とか、或は、修行僧のなかまはわれに頼っている、とか思うことがない」と説かれている。

更に釈尊は「この世で自らを島とし、自らをよりどころとして、他人をよりどころとせず、法を島とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとせずにあれ」と加えられた。

以上によって、釈尊が教団の指導者であるということを御自身で否定され、たよるべきは他人でなく、直接に自分で法に依れと勧められている。ここにも聖人の弟子一人も持たずとの御心に自然に一味であることが知れ、前聖後賢が軌を一つにされるのにおのずから襟を正さしめられる。

又、他山の石としてニイチエの「師よ師よと崇めるばかりが真の師弟の道ではない。速かに師の冠を取れ、そのことを師はよろこぶ」という言葉を引用された。人師とは、月を指す指である、その指を離れて月を仰ぐように、師を離れて真如の月を仰ぐ時、そこに師の心からのよろこびがあり、弟子は本当に師の恩を謝する道もひらける。

師を超えて、不滅の師弟道はひらける、そうでないと、どんなに濃やかな交りであっても、はかない人と人との一時の睦びに終る。

先生の無二の親友、近角常観師も「近角を見てくれるな、私を救って下さる仏心を仰ぐように」と仰言ったのも、同じ味わいである。

更に思いあわされるのは、道元禅師が、開眼の師として随喜された中国の如浄禅師との消息である。道元禅師は道を求めて中国に渡り、天童山の如浄禅師の門に入った。然しどうしても悟道が得られず、同伴した友は途中で病死した。半ばあきらめて、先師の語録を写して、せめてもの帰国の土産にと願っていたら、兄弟子からきびしく叱責され、先人の残した粕を集めて何にする。自分でそれが云える身になれ、と。そこに必死の求道となったが如何にするすべもなかった。その時、隣席で坐禅していた中国僧が、つい疲れて居眠りをした。これを見て如浄禅師は、強く打ち、大喝した。道元禅師は、この一喝によって、自分の心の眠りを醒まされ、忽然として悟境がひらけ、立ち上って仏前に進んだ。師はすかさず「身心脱落！脱落身心！」と問いをかけたが、静かに仏前に礼して、「和上みだりに人を印可すること勿れ！」と応えた。これは師をこえて仏心に直参する者の答えである。師はただちに「身心脱落！」とたたえ、師と弟子は互に謝し、且つ喜び合ったとある。

ここが、師を超えて師の恩の知られる境界であり、仏心

のもとに二つの魂のとろけ合う妙境である。

私はかって可成深刻な人生問題に行き悩んで、先生に愚痴をこぼした時、黙ってじっと聞き入って下さった先生が「君の現状は同情に堪えないが、君と僕とは境遇も性格も違うから、僕の考えを言ったって役に立つまい」と仰言って、一しきり念仏していられたのち、歎異鈔の話をして下さった。

今にして思うに、人間の力の限界をよく知っていられた先生が、力のない我々は、末通る仏の大慈悲を頂くのだ、そこに道は自然にひらけるからとの、仏心の月を指差して下さったのである。

人間が人間をたよっている間は、たとえ一時凌ぎは出来ても、やがて空しくなる。一人一人が直接に仏願を仰ぎ、「他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけり」と仰ぐのだ、方向違いをしてはいけないとの末通るご親切からであった、人に依るな法に依れ、との釈尊の御遺訓もここに知らされてくる。

幸に、先生のお導きによって私は、仏のみ声を聞く名所を歎異鈔の随所に見出せるようになり、身にもつあらゆる問題を機縁として、本鈔の何処かから、その答えをいただいている。

鈔を誦する毎に、いつも先生が微笑して見て居て下さるのである。今後、自業自得として、いろいろの業苦に行き悩む時、本鈔の何処かが先生と共に現われて、光となり、力となって下さって、障り多き旅のよき護念者、半侶となって頂き、やがて浄土まで導き入れて下さるたのもしさがある。

御名ひとつともしびとして古稀も過ぎ

聚墨記

（註）先生の御忌日を前にしるす。この稿は「生活と医学」誌に、学兄、川畑愛義さんが提出して下さったもので、その時の原稿に、多少の加減をしたものである。



## ともしび

聚墨生

道光明朗　超絶せり　清浄光仏となづけたり
一度光照かぶるもの　業垢をのぞき解脱をう
（浄土和讃）

「生は苦なり」とかねて釈尊が教えられる通り、苦のない人はいないが、その中に二通りの苦労人がある。一つは苦に遭うごとに、愚痴に閉ざされ、心も闇く、世間を白眼視して、孤立して行く人である。今一つは、「憂き事のなおこの上に積れかし、限りある身の力ためさん」と、苦を自分を鍛錬する素材とし、意志も強固で、事業にも成功する人である。

われわれも後者のようになりたいが、そこに大きな致命的な陥し穴がある。往々にしてこの種の人は、苦労を誇り、それを鼻にかけ、他人をも自分の型にはめようとする。だから表面は成功者とほめられながら、人々から敬遠される。

思うに、苦に勝って高あがりしたり、苦に負けて卑屈になったりするのは、同じ迷海の浮沈である。そこになくってはならぬのは、大きな飛躍である。そこに卑屈の泥と慢心の毒が洗われて、一切の苦悩の人々と同心し、共に悲しみ、共に喜ぶ広大無辺の天地がひらける。

白隠禅師は青年期に一つの少悟を得て、それを誇りとして、悟りの武者修業的なことを続けていた時、友人から、飯山の正受老人に会えと勧められた。そこで、正受何者ぞといった慢心が美事に砕かれ、あらためて参禅し、苦心惨憺の末、慢心が洗われ

よしあしの葉をひっぴいて　夕涼み
情あるもつらきも遠くなりはてぬ
うれしや　他所の山はたずねじ

と讃えらた。蓮如上人の「心得たというは心得ぬなり」に通じるものである。

さて、言葉では簡単であるが、身につく事はなかなか至難である。ルーテルは「洗えは洗うほど汚れる手」と云い盤珪禅師は「血は血で洗ってもきれいにならぬ」と告白されたように、自分ではどうにもならぬ。ここに弥陀仏の貪欲のない清浄光仏の御手がましまさねば、永遠に泥沼でのたうちが続くばかりである。南無阿弥陀仏。

（五十二年　四月十日）

# あとがき

秋も深まり、やがて裸木となって、冬陽を浴びる木々の姿に、信の旅の四季を教えられることです。この秋のみのりに相応し、左記の信仰書が刊行されました。聞思録と法悦抄の一部は本月号に御紹介しました、有縁の方々にお勧めいたします。

**聞思録抄　新刊**

苦悩の救済ほか三二四章　誉田豊吉著　B6一二〇〇円　送料一六〇円。思想と生活の徹底を期するため近角常観師につき道を求めた福岡師範教諭の随想集。全篇に信の叫び大悲讃仰の喜びが溢れている。

**法悦抄　新装版**

清水清吉著　B6八〇〇円　送料一六〇円。宮沢賢治の詩「雨ニモマケズ」の実践者として東奥・盛岡の人々に敬愛された念仏者の遺稿集。

**信仰体験録　重版**

安波勲八著　B6一〇〇〇円　送料一六〇円。死（胃ガン）の宣告を主治医よりうけた著者が他力の信仰に生き安祥として逝去されるまでの貴重な生活記録。

京都市左京区高野泉町四〇
振替　京都七七三四番
発行所　文明堂

更に、長崎の是真会から左記の書が出版されました。

**水の味**　高原憲著

著者略歴、大正の初め一高で近角先生に聞法、生涯の師と慕う。九大医学部時代にも仏青を結び求道、長崎で高原病院、次に是真会病院、東望療養所等を開設し、信を中心とした医療に専念、山本普道師と親交。

何もかも我一人のためなりき今日一日
のいのち尊し
はづかしや味なき水に味つけし我がは
からひのあはれかひなき
はづかしや医者（くすし）となりて四
十年自然治癒をしりそめし我
あすありと知るよしもなき我なれば今
日一日を生き抜かんと念ふ
水の味、味なき味をしりえてぞ無碍の
天地に通ずる心

発行所　長崎市古川町七ノ九　是真会病院
実費頒布五〇〇円　送料一二〇円

○

宮地廓慧師、山崎昭見師、等々の提唱によって国際浄土真宗協会（仮称）が呱々の声を挙げ、段々具体化してまいりました。二元対立の世界に、それを超えた親鸞聖人の教が伝わり始めたことは、内外の事情から機縁が熟したのでその健全な生長を祈念してやみません。

## 〈御案内〉

○毎月第一、二、三日曜、午後一時半、一道会例会。
市バス、新郊通り一丁目下車。
東入る三筋目左入る。
地下鉄、新瑞橋下車。
近鉄呼続下車
又は本笠寺下車、市バス乗りつぎ。

○毎月二十四日、午前午後
昭和区小桜町、教西寺法話会。
市バス、御器所通り下車、又は北山下車

○毎月七日午後、（日曜には変更）
尾西市三条板倉、蓮光寺修道会。
新一宮よりバス、三条下車。


定価　半年　七〇〇円（送共）
一年　一四〇〇円（送共）
名古屋市南区駈上町二ノ八八
編集・発行人　花田正夫
電話八二一局七〇三七番
愛知県西加茂郡三好町大字福谷
印刷人　坂部光雄
名古屋市南区駈上町二ノ八八
発行所　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番
郵便番号四五七

慈光　第二十九巻　第十号　昭和五十二年十一月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日　第三種郵便物認可